

「社会を明るくする運動」は、すべての国民が犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない地域社会を築こうとする全国的な運動です。

「社会を明るくする運動」作文コンテストは、次代を担う小・中学生の皆さんに、日常の家庭生活、学校生活などの中で体験したことを基に、犯罪や非行に関して感じたことをいきいきと作文に書いてもらうことを通して、この運動に対する理解を深めてもらうことを目的としています。

毎年、多くの小・中学生の皆さんがこのコンテストに参加していただいています。この度、第68回のコンテストで町立上多度小学校五年(受賞時)梶間 春花さんが入賞されましたので紹介します。



「社会を明るくする運動」県推進委員会委員長(県知事)賞

心と心を通わす社会を目指して

町立上多度小学校五年(受賞時) 梶間 春花

「春花さんなんて大嫌い。」

これはわたしが五歳の時に、幼稚園でお友達から突然浴びせられた言葉です。その当時のわたしは内気で、何かを言い返すことも、泣くこともできず、家族にも打ち明けられずにいました。

そのお友達は、それから毎日のようにわたしのことを大嫌いだと言っていました。

幸い、すぐにゴールデンウィークになり家で過ごしているうちに、そのことをすっかり忘れてしまっていました。

ところが、休みが明けて、い

つものように母がわたしを幼稚園まで送ろうとした時、わたしは大泣きして登園を拒んだのです。お友達に心ない言葉を言われたことを思いだし、こわくて足がすくんでしまったのです。

今までに一度も登園をぐずったことのないわたしを見て、母はずいぶん驚いたようです。このままでは、登園させられてしまおうと思ったわたしは、なぜ行きたくないのかを母に打ち明けました。

すると、母は、「どうしてもっと早くお母さんに教えてくれなかったの？今まで、誰にも言わずにひとりぐずまわしたの？」

と言って、わたしの目線の高さにしやがんで、わたしを抱き寄せたのです。

母はすぐに園長先生に話し、お友達に事実確認をして注意してくれました。

その後、お友達が謝ってくれて、仲直りすることができました。

この時、わたしは、自分ひとりで悩まずにもっと早くお母さんに相談すれば良かったのだと思います。自分だけでは解決できないことも、信頼できる人

に相談すれば、良い方向に導いてもらえるのだとわかりました。

それ以来、わたしは悩み事があると、真っ先に母に相談するようになりました。たとえすぐに解決できないことでも、自分の話を真剣に聞いてもらえるだけで、心は軽くなります。

この経験から、わたしは思うのです。犯罪を犯してしまった人は、そうなる前に誰かに打ち明けたい SOS を発していたのかもしれない、けれども信頼できる誰かに相談ができなかったのかもしれない。

また、罪をつぐなうって社会に出てきた人も同じです。前向きに頑張れるよう、みんながほんの少しでも優しく手を差し伸べてくれたら、きっと大きな一歩を踏み出せるのだと思います。

たとえば、わたしの学校では、学級自慢の取り組みがあります。クラスの仲間と協力して、同じ目標に向かって達成できるまで頑張るのです。目標が達成できた時の喜びを仲間と分かち合うのは最高のひと時です。

また、仲間の良さを見つけ、それを本人に伝える「キラリみつけカード」の取り組みは、カードに書く方も、書かれた方も

とても良い気持ちになれます。さらに、わたしは昨年から代表委員会に入っており、朝の登校時に昇降口で、あいさつ運動をしています。

自分から大きな声で元気よくみんなに

「おはよう。」

とあいさつするのです。自分から元気よくあいさつをすれば、相手も元気よく返してくれます。この運動を始めてから、わたしは地域の人にも積極的にあいさつするようになりました。

このように、人と人が心を通わすことが増えれば、犯罪のない明るい社会を築くことができるのではないかと思います。

わたしにできる取り組みは、ほんの小さなことかもしれませんが、大人も子どもも心を通わすことができれば、大きな力となり、誰もが生き心地のよい社会になると思います。

これからも、自分ができることは何であるかを考え、みんなで助け合える地域づくりをしていきたいと思っています。

そして、今よりも、もっともっと安心・安全な未来になるように頑張ります。